

ちひさ

古さと の 小き街の碑に彫られ

もも

のち

百とせの後あらむとすらむ

歌集『春泥集』

明治44（1911）年1月



文化学院提供

― 歌 意 ―

たとえいまはともあれ、かならず百年後にはふるさとの堺の街に、私の歌がささやかな碑に刻まれることであろう。そう願わずにはいられない。

この歌を詠んだ当時の晶子は、「明治唯一の詩人」「日本女詩人の第一人」（上田敏）と評されるように、近代女性表現者としてゆるぎのない存在であった。しかし、故郷の堺の人々からは、不忠不義不孝の女性として嫌悪や侮蔑の念をもたれていた。晶子の故郷への思いもまた愛憎の入りまじった複雑な感情があった。そうした故郷の人々に受け入れてもらうためには、これからも自己の感情生活を正直に歌いつづけるしかない、という決意がこめられた一首である。

没後80年の現在、晶子の魅力とその多彩な業績は、故郷の堺から世界に広く発信されていることはいまでもない。

令和4年12月7日

与謝野晶子倶楽部会長

太田 登